

連載：『小児科医やぎさん通信』 第4回

小児科医院におけるBPプログラム

新潟市「やぎもと小児科」医師 柳本 利夫

小児科医院に2か月の赤ちゃんとママが来る

小児科研修医が先輩から必ず言われたのは、「細菌性髄膜炎を見逃しちゃならんぞ」という注意です。乳幼児にみられる細菌性髄膜炎は早期診断が難しく、診断できても後遺症や死亡例などがあるためです。昔から「高熱が出ると脳膜炎になって頭をやられる」と一般の方にも怖がられていた病気です。ところが最近、この細菌性髄膜炎の予防接種ができるようになりました。細菌性髄膜炎の原因菌であるヒブ菌に対するヒブワクチンと、肺炎球菌に対する肺炎球菌ワクチンです。その効果は絶大で、ヒブ菌による髄膜炎は9割以上減少、肺炎球菌による髄膜炎も7割近く減少しました。この細菌性髄膜炎のワクチンは生後2か月から開始します。そのため生後2か月の赤ちゃんとママが小児科医院を訪れるようになりました。特に新米ママは初めての我が子の注射ということで、おっかなびっくり赤ちゃん以上に緊張しています。注射が終わり、ほっと一息ついている時に、医院のスタッフがBPのお誘いをします。ほとんどのママが関心を示して下さり、BPへの参加を了解して下さいます。新米ママにとって生後2か月というのは、子育てについて学びたいとか、子育て仲間が欲しいとか感じ始める頃なのかもしれません。私の医院には親子支援室と名づけた多目的室があり、BPはそこで行なっています。医院の昼休み時間や、休診日など駐車場が利用できる時間にBPを開催しています。

繁用される親子支援室

親子支援室は、BP終了後の自助グループの集まりに使ってもらっています。いつも予約でいっぱい状態です。集まりの時は、明るく楽しそうな笑い声が室外にも聞こえてきて、私も元気のおすそ分けをしてもらっています。午後の診療が始まる時刻には解散なのですが、話し足りないのか駐車場での立ち話にも花が咲いているようです。この親子支援室では育児相談のための保健室や、小児科医による健康講座や、ママ向けのヨガ教室なども開催されております。個別な悩み相談は保健室を利用し、まとまった小児医療情報は健康講座で聞けます。一番のおすすめはママヨガ教室で、子育てでこった身体を伸ばした後は、皆すっきりとしたお顔でお帰りになります。BP終了後、子どもはどんどん成長しますし、ママの事情や悩みも変わっていきます。個々の必要に応じて多角的メニューから選べるのは利点だと思います。欲を言えば、さらに親子あそびや絵本の読み聞かせなど、親子関係を豊かにするイベントも取り込めるといいなあと考えています。

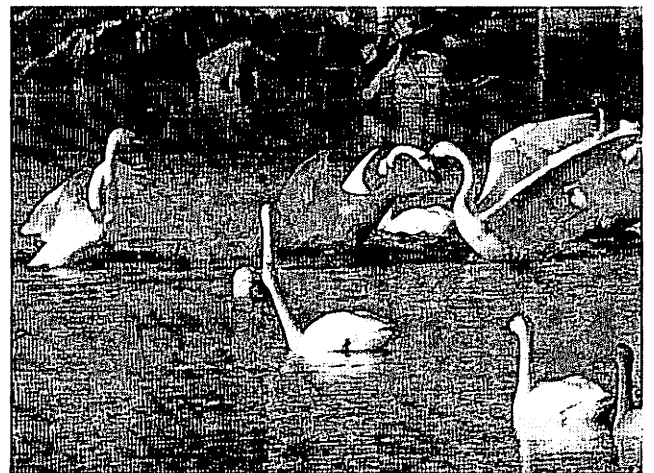
小児科医院がママのつながりを助ける

もともと予防接種で来院した親子にBPをお誘いするので、その後の予防接種や乳児健診、あるいは風邪をひいた時など医院を受診されます。乳幼児期はそのような機会が結構多いです。医院のスタッフがBPファシリテータですから、すぐに「どうしてたあ、大きくなったねえ」の会話が盛り上がります。BP仲間と待合室で偶然出会ったり、予防接種でいっしょになったりすると、お互いの情報交換が始まりとても楽しそうに話しています。

このように小児科医院を軸に、子育ての仲間がつながるといのはBP導入以前には経験したことがないものです。小児科医院がBPプログラムを取り入れ、新米ママの仲間づくりをお手伝いすることで医院がその地域でのつながりを助ける役割を果たすのだと考えています。そうなれば、その地域における小児科医院の子育て支援機能が増すことは十分期待できます。

生後2か月からの予防接種とBPプログラム

生後2か月から始める予防接種は、感染予防のための免疫力をプレゼントする身体の健康づくりです。生後2か月から始められるBPプログラムは親子の絆を深め、心の安定根をプレゼントする親子関係の健康づくりです。ふたつともに育ち始めた新しい親子へのすばらしい贈り物だと思います。小児科医院はこのふたつを提供できるという利点があります。そうです。これを生かさないと手はないですよ。



ハクチョウの佐潟

#佐潟には毎年10月になると北からハクチョウがやってきます。一緒にやってくるカモ類も加わりぎやかで華やかな佐潟になります。